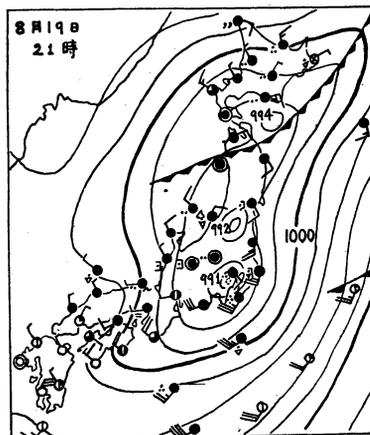


第1図 表紙写真説明図 黒点は地物のエコー、斜線が21時17分の雨域、破線は台風中心の進路。

係がよく分るであろう。遠い測候所では雨が観測されていないながらエコーが見えないところもあるが、恐らく雨が弱いためと思われる。横浜では実際に雨がやんでいる。

このような雨のない区域が果して眼といえるかどうかは分らない。上陸し衰えた台風の中心付近の雨域や風は多分に



第4図 8月19日21時天気図

地形の影響を受けるであろうから、発達した台風におけるような典型的な眼であるとは思われないが、台風の中

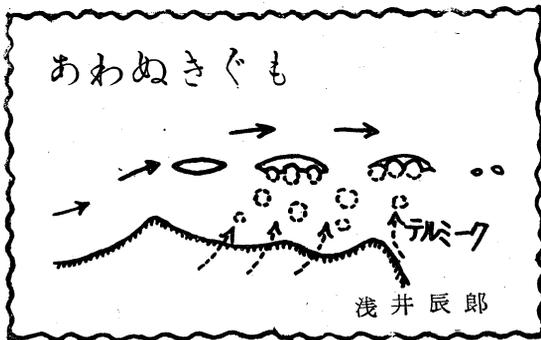
心に一致していたことは事実であるから眼に似た現象であることはいえるであろう。(気象研究所)

読者だより

数日前「天気3号」を開きました途端に、おやっ!!と思ったのは「尾瀬の雲」です。小生昭和17年5~6月、資源科学研究所が主催した第一次山西学術調査研究団に加わり、丁度1ヵ月山西省北部の五台山東台の頂上近く

当時の気象は天気図までは見ておりませんが、6月10日頃の午前で、前日の雨あがりのあと、西の風が老年小形の北台にあたり、そのうちに次々と莢状雲ができて、東の東台方面に流れてきましたが、そのうちに次第に透明な気泡らしいものが入り、ついに透明部分が多くなって、流れている間に消えてしまうものでした。

にパイロット、地上、植物  
気象的な調査を行いました。その節御説の「くらげ雲」と同じものを見つけ、地理学評論など数種のものに「泡貫雲(あわぬきぐも)」と命名して発表することがありました。「くらげ雲」の名は最も実感をそのまま示してよいですが、「げ」と「ぐ」の重なる言葉はどちらも発言しにくいのと、あまりくだけた感じがするからです。



以上のことは当時書いた論文の要旨に「雲の観測から熱気泡が莢状雲を貫ぬいて出来るらしい蓮根片状の「泡貫雲」、また別の日に莢状雲の中にだけ「積雲」の発生する「莢積雲」現象を発見した」と書いておきました。

講演の時には次のような説明をのべておきました。

「大へん日射の強い天気の良い日でしたから熱気泡が盛んであったものと考えます。もっと曇った日に浮力のない気球を放したら、ずんずん上ったこともありましたので。」

(資源科学研究所、法政大学地理学教室)

これらの報告はいずれも講演要旨や速報又は秘扱いのもので、写真も入らず、お目にとまらないのも当然ですが、近くこの写真(あまりよいものではないのですが)を妻が満洲引揚当時預けた台湾の知人から返送されて来ましたらば、お目につけたく思います。